

教員による振り返り

渡邊洋子・田中一裕・中村隆志（新潟大学）

本稿は、キャリア創生研究会の教員メンバーが、本イベントの準備プロセスや当日の活動の流れ、個々の学生の様子などについて、各専門領域を足場に独自の視点で考察を行う、多面的な振り返りの試みである。

今回のイベントは、大学一年生が主体となり、自らのニーズと問題意識に基づき、キャリアデザインに関わる活動を企画・運営する「学生主体型イベント」であり、初年次教育のカリキュラム外活動と位置づけられる。教員メンバーは当初の枠組づくり（ゼミでの呼びかけとニーズ確認、スピーカーの依頼、教室確保など）を担ったが、2018年1月初旬以降、企画・運営の主導権とプロセスは、呼びかけに応じた7人の学生（学生キャリア研究会）の手に委ねられ、以後、6人の教員は濃淡の違いはあれ、側面的な関わりに徹した。またイベント当日は、開始から終了後の振り返り座談会まで、全員が参観・参加した。同じ学部の「文系教員」であるが、多様なキャリアのバックグラウンドや異なる専門領域を専攻する利点を活かし、同イベントを共通経験に、学際的でユニークな多面的考察を目指したい。大学生のキャリアデザインへの示唆と領域横断的な共同研究への道筋を探れば幸いである。

キーワード：キャリアデザイン，学生主体型イベント，初年次教育，多面的振り返り

大学一年生が学習機会を企画・運営する意味とは —キャリア非直結型学部の初年次教育への示唆—

渡邊 洋子

はじめに

本イベントの構想は、2017～19年度の科学研究費・萌芽研究「初年次専門（職）教育と生涯キャリアデザインとの接合点の構築に関する実践開発的研究」（代表者：渡邊洋子）の問題提起を起点とするもので、領域横断的な共同研究を見据えて議論を進めてきた「キャリア創生研究会」の試行的取り組みの一環として生み出された。同研究では、医学部や薬学部などの「キャリア直結型学部」に対し、人文学部、工学部、経済学部、さらに新しいコンセプトの創生学部など、領域専門性が必ずしも特定の専門職養成に結びつかない学部を「キャリア非直結型学部」と呼ぶ。両タイプの学部の初年次教育が各々、生涯的視野に立つキャリアデザインをどのように組み込み得るか、その可能性と課題にアプローチする実践的研究である。

生涯教育学を専門とする筆者において、本イベントの意味は、表題の通り、「大学一年生が企画・運営した学習機会の意味とは」に集約される。この表題はさらに①「学習機会を企画・運営する」という学習支援にコミットする観点と、②「大学一年生が企画運営する」

という初年次教育にコミットする観点が含まれる。

なお、本稿が飽くまでも厳密な研究方法による実践研究でなく大らかな試論である点を強調しておきたい。

学術的背景

本論に先立ち、筆者が専門とする生涯学習研究・成人教育学の学術的背景を概観しつつ、①・②の観点について示しておきたい。

まず、生涯学習論は1970年代のユネスコ成人教育局長 P.Lengrand が提唱した生涯教育論から発展したもので、80年代以降、社会情勢の変化や知識経済社会に到来を前に、生涯教育よりむしろ生涯学習が共通概念となる。この動向は日本国内にも波及し、臨教審第三次答申（1986）以降、「生涯学習」概念が導入された。生涯学習とは文字通り、人は生涯を通じて発達し続け、学び続けるという前提に立ち、「ゆりかごから墓場まで」の生涯的視野で、乳幼児期から高齢期に至る発達課題、生活課題、地域課題、社会課題などに関わる多様な育ちと学び、相互の関わりの中での変容などを取り扱う。生涯学習研究は、学校教育や社会教育に加え、家庭や地域を基盤とするおとなや子どもの多様な学び、多様な学習機会や学習活動、余暇やスポーツ、多文化・多世代理解や文化継承活動、地域づくり、市民活動などにも及ぶ個人・集団レベルの育ちや変容、望ましい学びの実現に向けた環境づくりや支援等を実践的に検討

する視点に立つものである。

人々が日常的に経験する学びは、意図性・組織性・系統性の観点から3つに大別される。学校教育に顕著に見られる「フォーマルな学び」、教育的意図はあるが、時間や場所、人員配置などが固定されず（非組織的）、学習内容は系統的（「総論→各論」というよりは「各論→総論」と非系統性をもつ「ノンフォーマルな学び」、教育的意図のないところに生まれ、組織性・系統性の乏しい「インフォーマルな学び」である。本イベントは基本的に、ノンフォーマルな学習機会に位置づくが、生涯学習研究においては、これらすべての次元における学びと支援が考察対象になる。

二つの視点のうち、①「学習機会を企画運営する」は、生涯学習（支援）の視点である。与えられた学習方法を受動的に受け入れるのではなく、企画者としてどの程度、自覚的に学習方法を選び取り、捉えていたか。スタッフ学生たちはそこで何を目指し、参加学生（学習者）にどんな学びの場を提供しようとしたか（それはどの程度、実現したか）、そこでは何が問題点や課題と捉えられたか、が問いとなる。

他方、成人教育学の視点は、成人学習者の特性にもとづくおとなの学習のあり方に、実践的問題意識をもとにアプローチするものである。1970年、アメリカの研究者M.Knowlesが子どもの学習とは異なる成人の学習の特徴に注目し、欧州発祥の概念枠組で体系化した「アンドラゴジー」(andragogy)に端を発する学問領域である。従来の子どもの対象の教育学（教授学）は、ペダゴジー(pedagogy=子ども(paid)+指導する(agogos))というギリシア語の造語であった。Knowlesはこれに倣い、成人(andos)+指導する(agogos)、すなわち「成人の学習を援助するわざ(art)と科学」として、ペダゴジーの対極に、アンドラゴジーを設定している。

成人の学習理論は、Knowlesが成人学習者に最適の学習モデルとして提起した「自己主導型学習」(Self-Directed Learning)を基盤/起点に、多様な方向性をもって発達した。それらには例えば、認識枠組から行動に至る変容を捉えたJ.Mezirowの「変容学習」

(Transformative Learning)論、P.Freireが識字教育を足場に展開した「意識化」(Conscientization)概念と「課題提起型学習」(Problem-posing Learning, or Problem-based Learning)論、プラグマティズムに根ざしたJ.Deweyの成人の「経験的学習」(Empirical Learning)論、社会的実践共同体への参加プロセスと学びに注目する「正統的周辺参加」(Legitimate Peripheral Participation)論、人々の多様な社会的実践を協働の「活

動システム」として捉えるY.Engeströmの「活動理論」(Activity Theory)と「拡張的学習」(Expansive Learning)論、企業など「学習する組織」における個人と集団の継続的学習に注目するP.Sengeの組織的学習(Organisational Learning)論、そして専門職の学びにおける省察＝振り返りの意義と可能性を考察した「省察的実践」論(D.Schon)などが挙げられる。

これらの諸理論では、成人が多様な活動・行為の中で経験する様々な次元の学びのメカニズムや諸要因が、具体的文脈の中で探究されてきた。本イベントの考察においては、複数の理論が研究枠組になり得るが、まずはKnowlesのアンドラゴジー論を手がかりに、検討したい。すなわち、「行為の当事者」であるスタッフ学生において、本イベントの企画・運営という営み自体が、成人性・成熟度を育てる契機になり得たか否か、言い換えれば、スタッフ学生自身が本イベントに関わる中で、「教師/他者に教えて(設定して)もらう」存在から「自ら能動的に学ぶ」存在となり得たか、そこで何に気づき、どんな葛藤や課題を見出したか、それをどう乗り越えようとしたか、などが鍵となろう。

②「大学一年生が企画・運営した」は、初年次教育に大きく関わる部分であると同時に、このような成人教育学的な視点でもある。生涯発達の観点から見ると、大学一年生とは、青年期から成人期への過渡期に位置する。企画・運営側のスタッフ学生の学びにおいて、学生たち自身がイベントの成否に責任ある当事者であることが、その学びや参加態度にどのような影響を及ぼしたか、そこで何らかの変容や気づきが見られたか否か、などが問いになると考えられる。

考 察

イベント終了後、渡邊個人からグループlineを用いて次の問いかけをしてみた。「今回のように企画運営に関わって双方向でお話を聞くのと、設定された講演会でお話を聞くのでは、何か違いがありましたか？ある場合には、何が違ったと思いますか？」というものである。回答は、個別lineで受け取った。その結果、7人中、シンプルに「違いを感じませんでした」と答えた者が1人、何らかの「違い」について記述した者が6人あった。このうち3人が「双方向」や「グループワーク」などの学習形態を取ったことで感じた「違い」に、別の3人が運営側として参加したことで感じた「違い」に言及していた。以下、その内容を具体的に見ていく（下線は渡邊による）。

I 双方向・グループワークという学習形態による「違

い」に注目した記述

学習形態による「違い」を感じた3人のうち、以下の2人の学生に共通するのは、「話を聞く」という行為における量的・質的な手応えの違いを記述している点である。従来の「聞いているだけの講演会」に対して、双方向のグループワークや懇親会では、各々、「直接たくさんお話を聞ける」「実感を持って聞くことができる」と述べる。Aの学生はさらに、ゲストがグループワークや懇親会に参加することで、「学生には出てこないような意見」を直接聞くことができ、それが「新しい発見」に繋がったとする。またB学生は、グループワーク自体が「自分では考えないような新たな視点」で考えられる方法だと、改めての気づきを記述している。

A: 今回初めてこのような形の講演会に参加してみてものような聞いているだけの講演会よりも、グループワークや懇親会などでゲストの方と直接たくさんお話を聞くことができととてもいい形の講演会であったと思いました。またグループワークでゲストの方に参加してもらうことで、学生には出てこないような意見が聞いて新しい発見もできました。
(女子)

B: 私は双方向・グループワークを通してゲストスピーカーの方のお話を聞くことで、ゲストスピーカーの方のお話をより実感を持って聞くことができると感じました。／また、グループワークでは自分では考えないような新たな視点で問題に対して考えることができるという違いがあると思いました (女子)

Cの学生は、双方向に学ぶことの利点として「ゲストの方に問いかける」機会がある点を挙げている。通常の講演会などでは「ゲスト→自分」の一方向でメッセージを伝えることが基本とされる。質疑の時間が設けられることが多いとはいえ、その場で挙手して発言できる質問者以外にとっては、それが「自分」がゲストに問いかけたものと同等とはみなされ難い。今回、「ゲスト⇄自分」という場が設けられたことによって、すなわち、ゲストに問いかけることで、自分の考えが整理され、ゲストから「間違い」「違う視点」への気づきが得られるとしている。

C: 自分たちからもゲストの方に問いかける機会があるのは自分の考えを整理する、また間違いや違う視点をゲストの

方から得られるところが良いと思います。(男子)

ここで注目されるのは、ゲストへの「問いかけ」が、ゲストから答えを得るために質問するという行為に留まらなかった点である。この「問いかけ」を通して同時に、自分の内面における確認・検討・整理が可能になったこと、すなわち「ゲスト←自分」と同時に「自分→自分」という問題意識を生み出したという点である。以下、図1に通常の講演会での参加者（「自分」とゲストの関係、図2に双方向的な講演イベントにおける参加者（「自分」との関係）を図式化してみた。もちろん、図1のような通常の講演会でも、テーマそのものや講演内容・話法によって、参加者が自らを振り返る契機となる場合も考えられる。だが、双方向の講演イベントでは、図2に示したように、ゲストへの能動的な問いかけが可能になり、そこで参加者は、ゲストの話の内容やその背景、自分にとって新たな視点などを得るだけ。のみならず、その問いかけが同時に、自分自身の内面への問いかけとしても機能したと考えられるのである。

図1 一般的な講演での講師と聴衆 (筆者作成)

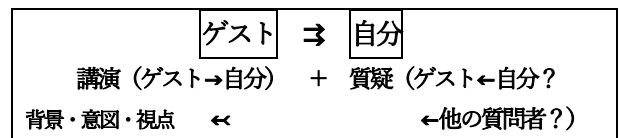
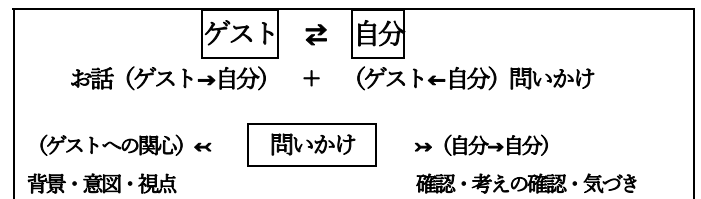


図2 双方向的なイベントでの話者と参加者 (筆者作成)



II 運営に参加した立場からみた「違い」に注目した記述

次に、「運営に参加した」という立場から感じ取った「違い」は、どのように記述されただろうか。各々、運営側として参加したことによって、Dは「深く考える」能動的な姿勢、Eは「お話を聞くモチベーション」「態度」、Fは会場をみる視野の違いによる、見えるものの違い、を挙げている。これらは運営への参加と直結するものばかりではないが、イベントの「運

営」側に初めて立った際の緊張感、イベント当日を迎えた高揚感や気持ちの込め方、これまでの準備の中で徐々に培われた、テーマやイベント内容への能動的関わり、現在進行形であるイベントの「現場」に責任をもつ運営当事者としての自覚や責任感、などがここに相互に重なり合いながら介在していたと考えられる。

Dの学生は、運営への参加によって、「ただ参加するだけ」とは異なり「記憶に残る」ほど「テーマについて深く考え」られたという。すなわち「これまでに考えたことがなかった部分まで掘り下げて考えることができた」と捉えている。本人がどこまで自覚しているかどうかは別として、推測される心的メカニズムとしては、第一に、運営側の一員として求められた能動性が、テーマに向き合う心的姿勢に波及し、結果として能動的に考える態度を引き出したこと、第二に、イベント準備の本格的な開始から約1か月間、少なくとも、打ち合わせのミーティングごとに同テーマに断続的に触れ続けていたため、思考の時間的な継続性が保たれたこと、第三に、テーマ内容について、自分の理解に留まるのではなく、(特に事前広報を通して)参加者にどのように共有してもらうかを考え抜いた、運営当事者＝学習支援者としての経験と問題意識が、一般参加者の時とは異なる思考の深さを生んだこと、などが推測される。

D:運営からイベントに関わることで、講演会のテーマについて深く考えることができたと思います。ただ参加するだけでは今回ほど記憶に残るイベントにはならなかったと思います。(深く考えることができた、というのは?)自分の知らなかった男女の働き方の問題点や生活の中の仕事のあり方など、今回のテーマに関してこれまでに考えたことがなかった部分まで掘り下げて考えることができたと思います。(女子)

Eの学生は、運営側としてゲストを迎えた立場から自らを振り返り、「お話を聞くモチベーション」「態度」という言葉で、その違いを表現している。「なんとなく」以下の下線部を見ると、運営側として、参加者がどんな内容を共有しているかを把握し、イベント全体の動向を確認し続けなければならないとの、一種の責任感のようなものが大きかったと見受けられる。

E:ただの参加者側と運営側では、お話を聞くモチベーションというか態度が違ってくと思いました。
ただの参加者であれば、とりあえず聞いてみるか、程度の

軽い気持ちの場合もありますが、運営側に回ると、なんとなく自分はお話を一生懸命聞かなければならない、という気持ちになる、ということです。(男子)

この学生は当初からテーマへの関心が希薄だったわけではないため、「運営側に回る(ママ)と、運営を上手くまわそうとして、せっかくの貴重なお話に集中できない場面があったことが悔やまれます」とジレンマを示す一方、「もし運営側に回らなかった場合、このイベントに参加者として、関わったかどうか断言できないかもしれません」と、テーマ自体より運営への関心の方が高かったことを表明している。

最後のFは、運営側の一員としての今回の関わりが同時に、イベント自体への初めての参加もあったという。同時に、運営側として「会場全体に視野を向けてイベントを進めていく」役割を担ったことを、「新鮮な経験と受け止めている。運営側、すなわち学習支援者の立場から見ると、授業などで通常、同じ学習者の立場で接している同級生との関係性が一時的に変化し、同級生の存在への認識も、普段とは異なるものになり、通常とは違う姿が目映っていたことが窺われる。

F:実際に運営をしてみたの感想なのですが、イベント自体に参加することが初めてだったので貴重な体験になりました。参加側とは違い、会場全体に視野を向けてイベントを進めていくことが新鮮に感じました。創生学部の学生の普段知らないような一面を見る機会にもなるとても良い体験をしたと思っています。(女子)

おわりに代えて

以上、今回のキャリアイベントに運営側として関わった学生たちが、通常の講演会などと比べてどのように感じたかを尋ねた結果である。対象者は少ないが、立ち上げから当日の開催までのプロセスに関わった学生たちの取り組みの様子と重ね合わせつつ、学生たちの言葉(言説)を吟味した。その中で、限定的ながら、いくつかの示唆と実践指針が得られたように思われる。それらを簡単にまとめてみたい。

1、初年次教育、すなわち大学1年時における教育的取り組み(初年次教育)としてキャリアを取り上げる場合、大人数で一方向の講演会よりは、少人数の双方向的なイベント・活動の方が、理解と思考の深まりにおいて有効性が高い。2、一方向の講演会とは異なり、双方向のイベント・活動の方が、参加学生がゲスト

トの話をゲストに問い返すと同時に、自分自身の内面をも問い返しながら聞くことができやすい。3、大学1年時においても、イベント・活動の企画・運営に責任をもって携わることによって、取り上げるテーマや内容に、能動的な態度とより深い関心を持って参加することが可能になる。4、とはいえ、初年次の取り組みでは、他者の学びを企画・運営すること自体がほぼ初めての経験となるため、必然的に、学生自身の当面の達成目標が、企画・運営の成否に焦点化されがちで、学習のテーマ・内容にかかわる事前学習や論点の掘り下げは難しい。

初年次に関わる4については、学びの内実や深まりに限定すれば、初年次段階では講義のほうが有効との見方が一般的であろう。実際に、今回のイベントに関わることによって、学生の当該テーマへのアカデミックな理解が深まったとは言い難い。とはいえ、アンケートで十分に救いきれなかったものの、当日や事後のやりとりから学生が得たものと示唆されたのは、以下の点である。当該テーマを「自分事」として捉え、向き合おうとする認識や態度、スピーカーから触発されたさらなる問題意識、スピーカーから直接に学び取ろうとする能動的姿勢、問題関心あるテーマを追究する学びの手だてとして、イベントの企画運営という学習方法を手に入れた実感などである。

いずれにせよ、企画・運営の側に立つことによって、学生たちには「与えてもらう学び」から「自らが能動的に学ぶ」への軸足の移行が可能になった。のみならず、友人を学習者とみなしてその学びを支援したり、全体を見わたして進行状況を確認したり、など「他者の学びを支援し働きかける」学習支援者というスタンスを得る者も見られた。他方、反省点や課題としては、学生挨拶が省かれるアクシデントや時間配分上の問題、質疑時間への準備や時間の使いかたなど、事前シミュレーション不足による問題点や課題が残された。これらは今後、学生自身が「次回」に活かしてくれるであろう。

なお、参加学生のうち4人から記名の感想やメッセージをもらうことができたので、掲載する。スタッフ学生の言葉と重ねながら読みたい。今後、より多くの学生が、学習支援者の経験によって学びの姿勢を転換してくれることを期待する。

主な文献

渡邊洋子『生涯学習時代の成人教育学—学習者支援へのアドヴォカシー』、明石書店、2012（2002）。

渡邊洋子編著『生涯学習概論—知識基盤社会で学ぶ・学びを支える』ミネルヴァ書房、2014。

渡邊洋子「成人教育学の基本原理と提起—職業人教育への示唆」『医学教育』2007,38(3):151~160。

渡邊洋子『近代日本の女性専門職教育—生涯教育学から見た東京女子医科大学創立者吉岡彌生』、明石書店、2014。

マルカム・ノールズ著（渡邊洋子監訳）『学習者と教育者のための自己主導型学習—ともに創る学習のすすめ』、明石書店、2005。

ピーター・ジャーヴィス著（渡邊洋子監訳）『生涯学習支援の理論と実践—教えることの現在』、明石書店、2011。

【資料】当日参加学生の感想（提出学生分、順不同）

すごく綿密に予定たててもらったおかげかすごく討論とかやりやすかったし、題材も男の立場からだと思えていないものだったから、勉強になった、ありがとう。次はもっと時間とって企画立案できるくらいになるといいね👍（齊藤季）

今までの講演会では、女性目線の話聞くことがあまりなかったので直接お二人と話せて今後について考え方が変わった。

それに同じ女性として男性社会の中で活躍する（生き残っていく）ことは難しいんだなって感じた。

グループワークを取り入れたのは良かったのもう少し時間を長くするか人数を少なくするか工夫が必要だったかなあと思いました。本当にありがとうございました！（田場川祥代）

司会の方は上手く進行出来ていたと思います！お疲れさまでした。話し方もめっちゃ良いと思いました。

時間配分についてはグループワークの予定されていた時間が少なかったかなと思いました。削ることが難しいのであれば、課題を一言ずつ回して言ってもらって一人が書いてまとめる形でも良いかなと思います。各自で書くよりも他の人に意見から考えを広げやすいし、時短になるかなと…。

解決策についてもそれでいいかなと…。

個人的な感想。すごい人たちと至近距離ではなせて緊張したけど、たのしかったです！自分が感じてた問題意識がまだまだ甘かったり、逆にこんな風に改善されてるのか！ときづきがあったり、勉強になりました。

ありがとうございました。(齊藤聖菜)

今まで、男女のキャリア形成の上での差についてあまり深く考えることが無かったのですが、今回の講演で男女の職場での対応の違いについての現状、課題を整理する事ができ、理解を深めることが出来ました。男女共に、異性への理解が不十分なため、やはり家庭科などの教育の段階から、ジェンダーへの理解を深めていくことが大切だと感じました。また同様に、50歳以上の所謂「粘土層」に対しても理解してもらえるように尽力する事も大切だと感じました。今後も、機会があればまたジェンダーをテーマにした企画に参加したいと思いました。講演の進行は、少し時間が延びましたが、組み立てがしっかりしており、とても良かったです。(関戸健太)

研究会イベント企画における学生の認識の変容

田中一裕

キャリア研究会イベントの学生との共同企画の過程で、学生のキャリア形成に与えた影響を、6回の企画会議と、事後の懇親会における振り返りから分析をおこなう。ゲストスピーカー2名を交えたイベントの企画に取り組む学生の認識は、ゲストスピーカーからのキャリア形成の抽出に集中していたが、次第に学生自らのキャリア形成の重要性や、社会における働き方全般に視野が拡大していく。イベント企画の過程で学生のキャリア形成への認識の変容の一部を明らかにできた。

はじめに

キャリア研究会イベントを開催するにあたり、学生主体の6回にわたる話し合いを実施し、教員も参加した。学生自身が主体的にイベント企画に携わり、研修会全体の目標、具体的な内容、討論のテーマ、グループワークの方法などを考察する過程において、学生自身のキャリア形成に向けた取り組みの必要性や認識の広がりを目指した。

当初学生の話し合いでは、「大学生にとってのキャリア形成の方法」、「自らのキャリアとは何か」、「現在大学生として何をすべきか」、などについて明らかにすることがテーマにのぼった。企画メンバーの創生学部

1年生は、入学後約10ヶ月を過ごし、2年次からの領域学修パッケージの選択も重なり、自分自身の将来の職業・職種選択を考えるには、絶好の時期であったと推測される。また1年次第2ターム(6月～8月上旬)に実施した「フィールドスタディーズ(学外学修)¹」は、学生が社会や企業の姿に触れ、学生自身にキャリア形成の重要性について深く認識する学修となった。このように学生自身のキャリア形成に対する興味や意欲が芽生え始めた時期において、この研修会のイベント企画は強い動機付けとなったと考えられる。

イベント準備過程

今回のイベントを企画するにあたって、学生に最も意識させた点は、「自分にとってのキャリア形成とは何か」であった。キャリア形成の重要性を学生自身のこととして、学生の内面から出る疑問を抽出させ、今後のキャリア形成に向けた学修への動機付けとなることを目指した。二人のゲストスピーカーに対する「日本の企業における育児休暇」、「家庭と仕事の両立」、「留学について」、「アメリカでの子育てと日本との違い」などが中心的な問いとして出され、議論の中心となり、イベント全体の企画目標となっていく。

以後学生の企画案が6回の話し合いのなかで、時系列に変化していく過程をたどりながら、学生の認識の変化を考察する。

(1) 1月16日(火)

ゲストスピーカーが確定した後の、二人の経歴などから、何を聞きたいのかを検討した。株式会社キットの中山さんに対しては、「次世代育成支援対策推進に基づく子育てサポート企業」として「女性の社長とは」というキーワードから、「子育て支援に対する実際の効果は?」「子育て支援が認定されるまでの経緯は?」「社長となるにあたっての男性社会の中での障壁などはあったのか?」「性別役割分業(イクメンへの意識)は?」という疑問が抽出されている。柏崎市議会議員上森さんに対しては「女性議員として」というキーワードから、「なぜ柏崎に戻ってきたのか?」「法学・経営学を学んだ後、議員となり子育て支援を中心に活動している理由は何か?」「日米で比較した女性の働き方の違いは?」「海外での経験をどう今に生かしているのか?」「仕事と子育ての両立はどのように?」という疑問が抽出されている。

企画構成としては、企画1「自己紹介」、企画2「質

¹ フィールドスタディーズ: 企業や自治体など、学外のフィールドに出て行き、グループで活動を行う学外学修

問]、企画3「キャリアについて」の3部構成のみが計画され、具体的な内容や方法については時間が不足していたため話し合われていない。

(2) 1月18日(木)

前回の分析をもとに、企画の内容について検討をしている。企画1を「自己紹介の内容を大体指定する」として「学生の興味関心を引き出してもらう」ことを主眼においている。さらに中山さんには、「子育て支援が認定された効果(生産性や雰囲気)」「導入した理由」「女性社長とは」という内容へ発展している。上森さんに対しては「日米での子育ての比較」「日米での子育ての比較」「経営学・法学から子育てへの変化」などの詳細が決まり、「海外との比較」を主眼とすることを明確にしている。また企画2として「対話形式」を用いることを検討し、「学生が少数グループ(5~6人)でテーマに沿って話し合い、ゲストスピーカーと共有する」とした。また、「対話の目的」として「学生の意見をゲストスピーカーに共有して知ってもらう。最後のところへつなげる」と定めている。企画3では、「どんな社会を作りたいか」「お互い(行政・企業)に求めること」について「二人で対話してもらう」「当日の感想を」おこなうとしている。

(3) 1月22日(月)

学生の役割分担と、企画2のグループワークのテーマを中心に話し合をおこなった。グループワークのテーマを考える過程で、今回の研修会そのもののテーマと大きく関連していることを踏まえ、「女性と男性が、ともに自分らしく働くために」というイベントテーマを決定した。また少人数のグループにはゲストスピーカー、大学教員も入って話し合いに参加するという形式を確認した。役割分担では、「交渉(おもてなし)」、「広報(チラシ作り、LINE)、レジメ・グループワーク用紙」「運営(司会・タイムキーパー)」の3つを設定し学生の担当を決定した。

(4) 1月25日(木)

それぞれの役割分担から詳細な決定事項が報告された。特に当日の進行について、企画1「ミニ講演」、企画2「グループワーク」、企画3「対話」が確定し、時間配分や当日の学生の動きなどを細かく設定した。企画2「グループワーク」では、「テーマについて話し合ってもらおう」「まとめて紙に意見を書いてもらう」「回収」「スピーカーに読んでもらう」という流れを決定した。また「対話」では、「互いに求めること」「グループワークを踏まえて、今後の社会についてフロアに向けて感想を一言」という内容を決定した。

(5) 1月30日(火)

チラシの原案が夕方15時にLINE上にアップされ、その後審議がLINE上で開始、多くの意見にもとづき次々とバージョンアップ版ができあがり、それをさらに修正し日付が変わる23時59分に9版目の最終バージョンが完成した。この過程では、単純な訂正だけではなく、チラシに掲載する2人のゲストスピーカーの順序や、参加者募集の欄に「どなたでも(高校生も歓迎)」という語句が追加された。

(6) 2月5日(月)

会場となる多目的教室で打ち合わせを実施し、当日の設営に関する予行をおこなった。机が2つしかなく、企画2のグループワークをおこなうには、机の不足が予想された。また、グループワークで話すテーマが「自己紹介の内容を踏まえて」では何を話しあうのかが拡散してしまい、企画3の「対話」でうまくまとまらないことが確認された。そのため、夜のLINE上でグループワークのテーマとして、「現状(何が問題か?)」「解決策」「理想(女性と男性が自分らしく働くとは?)」の3点が確認された。(この後、会場での机の不足などを考慮して、LINE審議で創生学部学修室での実施と変更されたため、当日イベント前に机の配置などを急遽再設定した)

考察(イベント企画における学生の意識の変容)

①イベント開催前

キャリア形成について、当初は男女の働き方について焦点をあてていた。「男女が平等に働く職場環境について」という意見が多く、個人のキャリア形成についての認識に対して注目は薄かったといえる。

②ゲストスピーカー決定以後

今回ゲストスピーカーは教員側からの提案で決定された。企業トップの中山さん、市議会議員の上森さんという、経済・政治分野でのトップランナーからキャリア形成について何を引き出すのかが議論の中心となった。(1)の議論から(2)へと進むにつれて、それぞれのゲストスピーカーの特徴から、キャリア形成に対する具体的な内容を引き出そうとする認識の深まりを見て取ることができる。

③企画のなかでの学生自身の認識の変化

イベントの「女性と男性が、ともに自分らしく働くために」というテーマについて、2時間の中で参加者

全体にどのように示し、考察を深めていくか、学生の議論が最も集中したところであった。(1)の段階では、「自己紹介」⇒「質問」⇒「キャリアについて」というキャリア形成についての具体的な内容に触れない形式的な流れであったが、(2)ではゲストスピーカーの特徴から「何を質問するのか」、「何を話し合うのか」という内容的な議論に移行している。(3)ではイベントテーマに立ち返り、イベント全体を俯瞰したキャリア形成の重要性についての構成を意識し始めている。

(4)では役割分担が決定され、企画1~3の大まかな手法も決定した。(2)から(4)の学生の議論の流れから、学生のイベント企画構成の認識が、「どのような手法でおこなうのか」を優先して思考している特徴が見て取ることができる。「意見を紙に書いてもらう」、「グループの人数」、「机の配置」などについての議論が優先され、「どのような内容について議論するのか」、「何を引き出そうとするのか」という内容的な議論は、「出てきた質問をテーマにする」、「当日のゲストスピーカーの話の中から選ぶ」などフレキシブルな手法が優先され、学生自身が内容について明確なテーマ設定ができていない状況であり、具体的な内容の議論が後回しになっていた。そのため再三教員側から「テーマは何か」、「何を引き出そうとするのか」という内容的な問いかけをおこなうことがきっかけとして、企画の具体的な手法とともに具体的な内容について次々と意見を交換し、当日のイベントを迎えるところまで十分な議論ができたと考える。

④イベント終了後の懇談会より

準備に段階に関わる学生の認識の変化について、懇談会の発言から抽出する。

懇談会の最初のところで教員側から「今日の反省点、上手いかなかったところはどこか」という質問に対し、「グループワークの時間が不足」、「パワーポイント資料の文字化け」、「ゲストスピーカーへの質問の少なさ」など進行に関連する内容が中心に出された。その後ゲストスピーカーに対する質問の少なさは、「企画メンバー自身も質問することができなかった」ことの反省につながり、「相手が何を話すのかを事前にしっかりと打ち合わせておけば、自分自身も先にその内容について勉強して質問することができた」という反省が変わっている。同様に他の学生も「講演で初めて知識を吸収するつもりだったため、質問できなかった」という反省をおこなっている。このように、当初進行についての反省が、内容的な自己内面的な反省へと発展し

ており、イベントを企画することを通して学生のテーマに対する認識をより深化させる効果があったと考えられる。

学生の次の振り返りは、認識の変容をうかがえる内容であると思われる。「特に私が思ったことは、こういう講演会全般にも言えるんですけど、やはり意識が強まるということだと思います。本を読んだり、ネットの記事を見たりするだけじゃなくて、直接人の話を聞いて、きょうのグループワークもそうなんですけど、自分自身で考えるというのは、認識を強める上でもそうですし、今日の話だけでは多分「働き方」の全部を知ったわけでもないですし、ほんの一部を一瞬知ったみたいな感じなので、これからどう学んでいくかというか、これからは繋げるやり方を考えていきたいと思っています」。

⑤終わりに

今回のイベント企画に参加した学生は、試験前の忙しい時間の中、集中して企画の立案にあたった。メンバー自体が初めて顔合わせをしたところもあり、開始当初の発言は遠慮がちな部分も見受けられたが、役割分担が明確になったあたりから個々が積極的に取り組んでいったように思われる。イベント企画自体初めてで、他のイベントにも参加した経験のない学生も多く、そのような状況においても、想像力を働かせ、今回のイベントを企画・開催できた点は評価に値する。特にグループワークという多様な意見が噴出する予想が難しい内容を、限られた時間の中でテーマに沿って話し合いがなされ、十分な成果を出すことができた点は、学生の初めての企画イベントとしては、高い評価を与えたい。

なおイベント終了後、学生のキャリア形成に対する認識がどのように変容したのか、その詳細な分析については以後の先生方の分析を参考にさせていただきたい。

強みを活かす

中村隆志

はじめに

新潟大学における創生学部は、2017年に誕生した新しい学部である。詳細は、パンフレットやHPを参照願いたい。通常の大学の学部と異なり、様々な学問領域を学生が選択できるカリキュラムとなっている。

1年次から学外での学修やグループワークを多く取り入れ、議論を行う能力の涵養を早い段階から行うことに力点を置いている点が特徴である。2018年2月10日に行われたイベント企画(新潟大学 創生学生キャリア研究会・キャリア創生研究会共催「女性と男性が、ともに自分らしく働くために」)は、まさにそのカリキュラムの特徴が発揮されたイベントとなった。学部の開始と同じ年度に開催された本イベントの意義を改めて再考するため、筆者が在籍する人文学部との比較を取り入れて、本稿を進めよう。

人文学部と創生学部

新潟大学の人文学部は、「由緒」ある文学部の学問領域に加えて、社会学やメディア論などを含めた領域で構成されている。ここでいう文学部の「由緒」とは、それぞれの学問領域が長い歴史を持っていることに加えて、学問そのものの出発点を含んでいることを指す。学問そのものの歴史、あるいは、大学そのもの由来については、専門書を参照したいが、端的に述べるとすると、学問の出発点は、その根源となる精神や思考の自由であり、それらは、哲学から始まり、さらに歴史学、文学という形をとり、現在の文学部の原型となっている。その後、学問領域は多様化し、そのうちのいくつかは派生して独立してゆくものの、学問の出発点となる精神や思考の自由、及び、それらと直接的な結びつきが強い哲学、歴史学、文学の3領域は、文学部(人文学部)において継承され続けている。

一方、創生学部は、様々な学問領域を横断的に見渡し、そこから得られた問題関心を目標として、直接的に探求を行っていく。学問の根源に近く、精神、思考の自由を重んずる文学部(人文学部)と、多様な学問領域に目を配り、探求するテーマを創り上げていく創生学部を比べてみると、その思考の自由さという面で、互いに相通じるところが大きい。

入門する者／人文学部

相通じるところが大きい2つの学部であるが、相違点もある。文学部(人文学部)は、連綿と続く後継者養成機関である点が創生学部と大きく異なる。入学してくる学生は、文学部(人文学部)内の学問領域に「入門」する。一部の卒業生達が、それら学問を大学院などで引き継いでゆき、次代を担う研究者兼教員となり、そして、次の後継者を養成してゆく。学問の根源となる精神や思考の自由を継承する、という点で、頑固なまでに後継者養成を貫いてきたのが文学部(人文学部)

である。

それぞれの学問領域内では、様々な思考のヒント、思索のきっかけに出会う仕組みが用意されており、入門した学生達は、多様な刺激を受け続けて成長することが可能である。その反面、それらの恩恵は先人、先生、先輩といった、「先に」入門していた人達の影響下にあることになる。なぜならば、後継者養成機関に入門したての学部生は、いわば、学問領域の最後尾に位置するからである。順調に成長してゆくことが可能になる一方で、同時にそれは、「先に」入門していた人達が手配してくれたものを受け取ること、つまり、受動的側面を持つことと引き換えとなる。

見渡す者／創生学部

創生学部は、創生学部そのものの後継者養成を目標としていない。創生学部の教育方針は、個々の学生の自律的な探求と成長を促すためのものであり、創生学部の教員養成に直接繋がるものではない。実際、現時点では、創生学部と直接つながる大学院は、計画すら無い。創生学部を卒業して、研究者、大学の教員を目指す者は、他の学部と繋がっている大学院へ入学することになる。後継者養成のための機関ではないことは、組織や序列を維持する仕組みから解放されることを意味する。創生学部では、これまでにない挑戦が可能になる。

多様な学問領域を見渡し、そこから問題関心を見いだして、挑戦してゆく創生学部の探求のプロセスは、挑戦的な思考を可能にしておき、冒険に満ちていると言えるだろう。「冒険」という言葉を使うのは、探求する問題やそのアプローチによっては、基礎力不足、経験不足を伴うリスクがある、ということがその理由である。学生のためにリスクを軽減するのは、創生学部の教員の役目となる。このことは、テーマ設定と教員の導きが成功すれば、探求すべきテーマに向けて、能動的な取り組みが可能になるということの意味している。「成功すれば」という但し書きがつくものの、通常の「入門」を必要とする後継者養成機関では、著しく困難なプロセスが実現可能になる点が強みとなる。

一年生が社会問題に取り組む

創生学部は、1年生のスタート時から各学生に、学びの目標を自ら設定してゆく指導を行っている。このことが、1年生の段階から、社会問題にまつわる様々なイベントを起こしやすくなることにつながるのである。

では、今回のイベントで注目すべき点は、どこだろうか？創生学部の1年生の長所はどこで発揮されたのだろうか？それは、パネラーのお二人のご講演をただ承るだけでなく、新しい意見を引き出し、それを参加者と共に共有する仕掛けを作った点にある。イベントの後半、つまり、パネラーのご講演後に、参加者とパネラーがテーブルを囲んで討論を行ったことは、パネ参加者とパネラーとの間に密な意見交換の場を提供した。これまでに多くの講演をこなしてこられたパネラーのお二人に、「今回、初めて」と言わしめたこの企画は、創生学部が1年次に行った学外学修や基礎ゼミなどの教育内容が直接のヒントになっている。このことは、創生学部の1年次向けの教育内容を、彼(女)らが応用できるようになっていること、つまりは、1年次のカリキュラムが、早くも彼(女)ら1年生の血肉となって修得されていることを意味する。

このように、学部生が能動的な挑戦を行い、これまでの学修プロセスを成長の糧としたことは、創生学部の1年次の第1期生が切り拓いた方法論であり、成長の道である。

新しい道

学部生がこのようなイベントを企画して成長を遂げることは、現時点での文学部（人文学部）では容易ではない。入門したての文学部生（人文学部生）は、後継者養成の最後尾に位置している。入門しないままに挑戦を行える点が創生学部の強みとなるだろう。

学術イベントの開催を学部生に促すことが教育の一環になりうるという実績を得たのは、創生学部の教員にとって、喜びを持って迎えるべき経験である。このような教育の方法論はどこまで広げうるのだろうか？彼(女)らは、どう成長してゆくのだろうか？この方法論の射程を見渡し、可能性を広げていくこともまた、創生学部の学生が歩んでゆく道になるだろう。そして、その道の先にある卒業後において、創生学部の強みを活かし、新しいタイプの社会人、新しいタイプの大学院生となって活躍してくれることを期待しつつ、この稿を閉じることとする。